心奥探訪

～役割を与えられ続けた女性が歩み出した　自分の”生き様”～

太陽がギラギラと輝きだす7月。
昔ながらの商店街にも夏らしい物が並んでいる。
下町の雰囲気を残した街並み、どこからか聞こえる風鈴の音が耳を通り過ぎていく。

「暑かったでしょ」

商店街の端にある一角に入ると、
穏やかな声と笑顔を携えて、彼女が出迎える。

彼女と出会ったのはもう何年も前になる。
その頃の彼女はどこか気弱さを感じさせ、”自分”という存在を探しているようだった。

彼女は何を探し、何を求め続けてきたのか？

そこには、主婦として、女性として歩んできた彼女の生き様が記されていた。

姉と兄、兄妹間は良く幼い頃は一緒に遊んでいたという。
中でも姉とは同性といういうこともあり、家族内での話し相手だったという彼女。

「地元で話せる人がいなくなって」

大人しくて頑張り屋、そんな彼女が中学では私学に入学。
生まれも育ちもずっと同じ街で過ごしてきた彼女だが、
それでも学校が変われば環境も変わる。

幼い頃から頑張り屋だったのは親に認めてもらいたかったからだという。
商いを営む家庭で生まれ育った彼女にとって、その世界はまるで男尊女卑そのものだったと振り返る。
もちろん全てがそうではないだろう、けれどそういうことがまだ常識としてあった時代が確かにある。

同じことをしても兄は褒められ、彼女には何もない。
だからこそもっと頑張ろう、それが彼女にとっての当たり前の日常だったという。
母に対して甘えた記憶がほとんどないという彼女にとって、
姉が話し相手だったことは必然でもあり、話すということで救われていた部分もあったのかもしれない。

そんな姉が見合い結婚をし、家を出たのは彼女が中学3年生の時だった。

「ポッカリ穴が空いたみたいで」

自分の気持ちを口にすることが減っていったという彼女。
そこから高校、短大、就職と親が勧めるまま時が流れる。

大学だと見合いの確率が減る。
そんな理由で短大を勧められたり、子供の頃の習い事にまでお見合い前提での教育があったという。
個よりも家が優先される世界。

彼女に見合い話がきたのは、社会に出て数年、就職先の銀行が統合し、
業務的にもしんどかった時期だった。

お見合い自体に期待も何もしていない。
そんな中、見合い2人目で出会った彼は気さくでフランクに接してくれたという。

わずか半年余りで籍を入れることになり、晴れて2人は夫婦となった。
出会った当時を振り返り、旦那からは「めちゃくちゃ嫌そうな顔してた」と笑って話す彼女。
しかしこの時はまだ、腹を割って話せないと感じていたという。
それは彼女を取り巻く環境が故だった。

嫁いだ先も職人、自身の家も商いということもあり家族の繋がりだけでなく、仕事としての繋がりも強い。
彼女にとって身内と社会は同一だった。
だからこそ片方で何かしらの不満があってもどこにも漏らすことができない。

「新しい家族を作れるかも」

それでも彼女の中には、自分から始まる新しい家族が出来る期待に胸を膨らませていた。

しかしそんな期待もすぐに打ち砕かれることになった。
結婚してまもなく第一子である長男が生まれた。
嬉しくて嬉しくて仕方がなかったという彼女。
実家から出て、母からの影響は少なくなったが今度は姑との関係が色濃くなった。
どこか母と似たタイプでもあり、子供との時間は姑との3人の時間でもあった。

姑との関係性や母と姑との関係など、彼女が女性の幸せとは何なのか？を
深く考え始めた時期だったのかも知れない。

専業主婦という世界の中で自分や周りの女性が、どこか駒のように感じていたという。

そして第二子である娘が誕生した。

この時も嬉しさが湧き上がったという彼女。

この子には今度こそ自分自身が子供の頃、
親の言いなりになって出来なかったことをやらせてあげたい。

そんな想いで過ごしていたある日。
良かれと思って子供たちに勧めたことに子供が反発したのだ。

これまで言いなりになっていた彼女にとっては衝撃だったかも知れない。
けれどもこの出来事が彼女にとって大きなきっかけになった。

「私を人間にしてくれた子供たち」

奇しくも自分の母と同じようなことを子供にしようとしていた彼女。
彼女自身が出来なかった反発を子供たちがしてくれたことで、
子供たちを一人の人間として向き合うようになったという。

そしてこれが彼女を呪いのように縛ってきた“駒としての自分”を解いていく始まりとなった。

そこから彼女は交友を広げ、外へと飛び出した。
多くの人と出会い、一人の人間として話す。
主婦でもなく、妻でもなく、親でも子でもない、ただ一人の人として。

「子供の時、出来なかったことを今している。」

振り返りながら彼女は楽しそうに笑っている。
『自由に動いていい』夫からかけられた言葉にも背中を押され、
彼女はまた一歩踏み出していく。

女性の幸せとは何なのか？
女性の生き様とは何なのか？
幼い頃から当たり前だった世界でずっと感じてきた想い。

それは与えられた役割の中、必死でもがいてきたから彼女だからこそ、
見つけられる答えがきっとあるのだろう。

彼女なりの生き様が答えになることを
きっとその歩みは知っているのだから。